

特異的言語発達障害児 1 例の発達経過 —他症例との比較検討—

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・吉岡豊
松田病院リハビリテーション科・富所桃子
市立砺波総合病院リハビリテーション科・中田実希
秋田赤十字病院リハビリテーション科・土佐香織

【背景】

特異的言語発達障害（以下、SLI）児に関して、特にアメリカでは動作性知能が 85 以上、標準化された言語検査で $-1.25SD$ 以下などの操作的な定義がなされている。我が国では 1990 年代頃から SLI 児という用語が使用されてきたようである。SLI 児の特徴を明らかとするために様々な検討がなされているが（石田 2003, 大伴 2004, 伊達ら 2005, 福田ら 2007, 今給黎ら 2008）、そのプロフィールは症例ごとに異なり、SLI といわれる症候群はヘテロな集団であることがうかがわれる。我々は、2 歳代で SLI と診断された 1 例を 3 歳～5 歳まで定期的にフォローする機会を得た。そこで本研究では、本例とこれまで報告された SLI 例のプロフィールを比較することにより、本症例の特徴について検討することを目的とした。

【方法】

1. 対象

観察開始当時 3 歳 0 か月の男児。妊娠時、出産時、新生児期に特記事項なし。定頭 3 か月、始歩 11 か月と全体発達に問題はなかった。初語 1 歳 8 か月、2 語文 2 歳 5 か月であったが、2 語文の初出以降 3 歳 3 か月頃までの文の表出はほとんどなかった。ことばの遅れを主訴として 2 歳 0 か月より A 病院にて言語訓練を週 1 回の頻度で受けた。父親の転勤により 2 歳 9 か月時より 3 歳まで訓練を受けない状況が続いたが、3 歳 0 か月から週 1 回の頻度で言語訓練を再開した。

2. 検査

時期に応じて発達検査（遠城寺式、津守・稲毛式）、知能検査（人物描画テスト、大脇式、WPPSI）言語検査（PVT, PVT-R, 田研式, ITPA, 幼児・児童読書力検査）、Frostig 視知覚発達検査を実施した。これら諸検査の結果を他症例と比較した。

【結果】

1. 発達検査の比較

検査時年齢が各症例で異なるため、その年齢時点でのプロフィールの違いを検討したところ、津守・稲毛式精神発達質問紙を実施した今給黎の例（2 歳 5 か月時）では探索、社会、食事の項目で 9 か月程度の遅れを認めたが、本例（3 歳 9 か月時）ではこれらの項目に遅れは認められなかった。なお、Frostig 視知覚発達検査では 4 歳 2 か月時に PQ123 であったが、今給黎ら（2008）では 4 歳 5 か月時に PQ90 であった。

2. 言語検査

本例では絵画語い発達検査（PVT, PVT-R）を 3 歳 0 か月、3 歳 8 か月、4 歳 0 か月、5 歳 0 か月時に実施し、いずれにおいても年齢以上の語彙年齢であった。なお、発語がほとんどなかった 3 歳 0 か月時点の語彙年齢は 3 歳 6 か月であり、一方 5 歳 0 か月時は 6 歳 5 か月であった。石田（2003）では 7 歳 5 か月時には 4 歳 9 か月、大伴（2004）では 5 歳 10 か月時には 3 歳 0～2 か月、今給黎ら（2008）では 5 歳 2 か月時には 4 歳 6 か月と語彙年齢が下回っていた。表出面に関して、田研式言語発達検査にある表出語彙検査の結果では本例は 3 歳 1 か月時点まで評価不能、3 歳 5 か月時点では語彙年齢 3 歳 7 か月、4 歳 7 か月時点では 4 歳 9 か月であった。一方、石田（2003）では 7 歳 5 か月時に 4 歳 5 か月と著明な遅れを認めた。

ITPA について本例の PLA は年齢相応（3 歳 6 か月レベル）で視覚—運動回路、特に絵がしがが優れていた。他方、大伴（2004）では 5 歳 11 か月時の PLA は 4 歳 11 か月と 1 年の遅れが認められ、今給黎ら（2008）では聴覚—音声回路が優れ本症例とは異なっていた。

3. 知能検査

3 歳 10 か月に実施した WPPSI では VIQ80, PIQ126 と乖離が認められたが、4 歳 8 か月には VIQ103 となった。なお、2 歳 3 か月時の大脇式検査では IQ126, 3 歳 0 か月時の DAM では IQ156 であった。これに対して他症例の VIQ は石田（2003）が VIQ51, PIQ100, 大伴（2004）では VIQ54 と 60 であった。福田ら（2007）の症例では 1 例だけが VIQ87, 他の 2 症例は VIQ75 以下であった。

【考察】

これまで報告された SLI 児とは異なり、本症例では表出言語以外は年齢相応以上であり、他症例よりも他の言語能力や知能の面で優れていた。SLI 児がヘテロな集団であることはこれまでも指摘されているが、本研究の結果もこれを支持するものと思われる。SLI には統語に問題を示す S-SLI と語用に問題を示す PLI のいることが報告されているが、本症例は文レベルの表出が遅れており S-SLI に該当すると思われる。

SLI 児は就学後学習障害を呈する可能性の高いことが示唆されているが、これには基本的な知的能力や視知覚能力が関係しているものと思われ、就学前にはこのような能力についても検討しておく必要性が示唆される。

【文献】

- 1) 石田宏代（2003）特異的言語発達障害児の言語発達—臨床の立場から—。音声言語医学。44, 209-215.
- 2) 今給黎禎子, 笠井新一郎, 藤原雅子, 中山翼, 山田弘幸（2008）特異的な発達プロフィールを示した言語発達遅滞の一例。九州保健福祉大学研究紀要。9, 121-126.
（本研究は平成 21 年度新潟医療福祉大学研究奨励金の支援を受けた。）